



坊っちゃんを読んで

渋谷本町学園中学校 八年C組 嶋莉子

日本人なら誰もが知っていると言っても過言ではない作家、夏目漱石の作品をもっとじっくりと読んでみたいと思い、この機会に夏目漱石の代表作である、「坊っちゃん」を手に取りました。この作品は夏目漱石の作品の中でも最も多くの人々に愛読されている作品の一つであるため、この作品が広く親しまれる理由が知りたいと思いました。そして私はこの物語を読み進めていく間に、それは「坊っちゃん」の無鉄砲ながらも正直で裏表のない純粋な性格や、彼の潔く、感情豊かで人間味があるところに読者が引き込まれるのではないかと感じました。

「坊っちゃん」は物理学校を卒業後、四国の中学校に数学教師として赴任し、新天地で様々な人と出会います。その中で、「坊っちゃん」は世の中の不純さに辟易し、「考えてみると世間の大部分の人はわるくなる事を奨励している様に思う。」や「単純や真率が笑われる世の中じゃ仕様がなない。」などと、世の中を批判します。私はこのように考える事が出来る彼の真つ直ぐさにとっても引き込まれました。「朱に交われば赤くなる」という諺のように周りに惑わされずに、彼は物語の最後まで周りの大人達にある腹黒さを持たずに常に自分の意見をしっかりともっていたと思います。彼のように周りに流されずに生きることとはなかなか出来ないことだと思うので、それが当たり前のように出来るのも彼の良さの一つではないかと思いました。また彼は誰に対しても自分の

利益や不利益によって態度を変えたり、裏で狡いことをしたりせず、嘘もつきません。このように自分の意見に自信を持ち、自分の非は素直に認めるところなど、真つ直ぐで裏表がなく純粋な彼の性格に読んでいて飽きませんでした。

他にも、小説の中で「坊っちゃん」は喜怒哀楽がはっきりしていても親しみやすいところがあると思いました。日々の生活が描かれている中で彼はいつも様々な感情を常に的確に毒舌とも言えるような辛口で表現することも印象に残っています。このような確な表現が出来るのは、彼がとても観察力が鋭いからだと思います。例えば、赴任先の学校の先生には「狸」や「赤シャツ」、「山嵐」や「うらなり」などの一人一人の個性や特徴をとらえたあだ名をつけたりと、人をよく観察していることの表れです。そして「坊っちゃん」は物語の始めの子供の頃から、大人になっても「人に隠れて自分だけが得をする」などの不人情なことをせず、義理をととても大切にしました。例えば子供の頃は仲が悪い兄に対して、自分だけがお菓子や色鉛筆をもらえろという時などは彼はそれを嫌がりました。まだとても未熟な子供の時からそのような狡いことを嫌がったり、正義を貫いたりすることができ、それを大人になっても数々の場面で変わらずに続けていることに感心しました。この小説では、「坊っちゃん」の行動は「無鉄砲」と書かれていて、実際に私もその通りだと思いました。彼の行動には「無鉄砲」だけでなく、決断力のある「潔さ」もあるのではないかと感じました。普通の人なら躊躇してしまうであろう、自分の得にもならないようなことでも、彼は迷いも

なく出来るという良さもあると思います。この「潔さ」が彼のきつぱりとした言動を生み出しているのだと思います。

このように「坊っちゃん」の性格には一貫して「強さ」があると思います。正義を貫くところや、いつも真つ直ぐであること、そしてそれが自然と出来てしまうことが彼の「強さ」であり、良さであると思います。物語では早くに両親を亡くし、苦勞が多い筈なのにもかかわらず、「坊っちゃん」はたくましく生きていけるというのも、この「強さ」が関係しているのかもしれないと思いました。

夏目漱石によつて書かれたこの有名な作品を読んで私は、この作品が長年に渡つて広く愛読される訳が良く分かったような気がしました。「坊っちゃん」の性格には沢山の魅力があり、人を虜にしてしまうような何かがあると思います。小説の中でも書かれているように、世間では正直で純粋な人がいるとそれをこの作品の題名のように「坊っちゃん」などとからかったり無知だと言つて軽蔑することがあるかもしれません。しかし、私は正直で純粋であり続けることの難しさや価値を「坊っちゃん」の魅力的である性格を通じて作品を楽しみながら知ることが出来たと思います。